

# 翻刻 曲亭馬琴の黄表紙（十一）

清田啓子

凡例

一、「駒澤短期大学研究紀要」第二十二号に、「翻刻 曲亭馬琴の黄表紙（十）」を載せた後の続きとして、享和三年刊『阴兼阳 珍紋図彙』・『信濃客人／浅草主人 俟待開帳話』及び享和四（文化元）年刊『小夜中山霄啼碑』をとりあげた。

一、底本には、東京都立中央図書館加賀文庫本を用い、大東急記念文庫本によって校合した。

一、黄表紙の性格上、絵組が重要であるので、複製のかたちで各丁見開きの面を一枚の写真とし、丁付により「一ウー二オ」のように示した。なお、この写真は、中央図書館蔵本を手控え用として撮影させていただいたもので、同館の許可を得て掲載した。

一、本文翻刻は、やはり「一ウー二オ」のように冠して、写真と対応させた。丁移りは「」で示したが、書入れについては丁付にこだわらなかった。

一、上記の一面が二枚の絵組から成る場合、翻刻のみ「五ウ」「六オ」というふうに分離した。

一、翻刻については次の方針によった。

- 1 原文はできる限りそのままとする。かなづかい、あて字、おどり字、濁点等は改めなかった。
- 2 漢字・仮名とも、異体・略体字は、現在通用の字に改めた。
- 3 読みやすくするため、句読点は補った。
- 4 スペースの関係上、漢字におきかえた所もある。その場合、もとの仮名をルビに移した。

5 原文の振り仮名は、右と区別するために（ ）に入れた。ただし序文等仮名つきの部分は、一々（ ）をつけず、その旨をその箇所ごとに断った。

6 書入れは、本文のあとへ一段下げて付け足し、大体、右から左へ、上方から下方へという順で並べた。

7 脱字と思われるものは（ ）内に補い、衍字と思われるものは（ ）に入れた。

8 判読しにくい箇所も数多くあったが、読みとれた形に一応おきかえて、大方の御示教を仰ぎ待つこととした。

都立中央図書館、大東急記念文庫の御好意に感謝いたします。

#### 付記

享和二年五月九日江戸を発ち、八月二十四日に帰着した京阪旅行は、馬琴に濃密な養分と自信を与えたこと、諸先学の指摘の通りである。黄表紙においては翌三年の『臍沸西遊物語』『阴兼阳珍紋図彙』『俟待開帳話』、次の年の『小夜中山霄啼碑』に殊に顕著な旅行のレポートが見える。『西遊物語』は説に翻刻が具わる（未刊江戸文学）ので、残り三作をここにまとめた。

この時の旅行記『覇旅漫録』に記す「五線の山水」の条が『阴兼阳』のモチーフと共通することは夙に国領不二男氏「滝沢馬琴の黄表紙」が挙げられたが、その他にも『覇旅漫録』の利用（あるいはその逆？）が散見できるので、左に掲げておく。

1 『覇旅漫録』の序文「くれ竹のせまきふしどに」以下三分の二ほどは、『開帳話』一ウー二オ、二ウー一ぱい位まで、細かい字句の違いはあるが、ほぼ同文である。

2 同右二オ書入れの盧橋老人、吾雀ぬしは『覇旅』八十八、百十九の条に交友が描かれている。

3 『阴兼阳』一オ「かゝみ石」の歌は『覇旅』三十六「鏡山」の条にもしるす。

4 『小夜中山』一オ「新坂蕨鮭」云々の詩は『覇旅』十一「小夜の中山」条下に同文でしるされている。

その他、土地々々の記述や土産物などへの言及もある。

かげとひなたちんもんづゐ  
**陰兼陽珍紋図彙**

〔一オ〕

かげとひなたちんもんづゐ  
**陰兼陽珍紋図彙**

かゝみ石うつる日かげも旅くしげ

ふた月へたつあつまちの家

去「載肇」秋余遊「觀」洛「北」紙屋鏡ノ岩ヲ而以

所「詠」スル之戲咲歌ヲ題ニ卷端ニ

享和三癸亥孟春

僊鶴堂開鐫

〔二ウーニオ〕

影は形を写してその色を写さず、たゞ色を写すもの水と鏡とのみ。

しかれども日かげの五色を写すこと又なきにしもあらず。信州諏訪

の社の柱の穴に紙を押当てれば塔の影写る。又京都大宮通り丹羽

氏の座敷の戸の節穴よりも東寺の塔写る。いづれも描きたるか如

し。もつとも逆さまに写るなり。

〔振り仮名は原文のまま〕

著作袁馬琴撰

〔一オ〕



やつかれ去年西遊のついで、三州岡崎より一里半にして庵の朝倉  
 屋三笑を訪ふ。此家の納戸の戸の節穴に紙を押当てては十間ばかり  
 向ふの築山山水描ける如く、これも逆さまに写るなり。やつかれ目  
 のあたりこれを見たり。庭に山水あり草木あり、十間四方の風景僅  
 か美濃紙一枚のうちへ鮮かに写る。天地草木五色を分ち、竹、柳、  
 杜若の風に「そよく風情、空には、雲或ひはあつまり或ひはちりゆ  
 き散じ、百景実に未曾有うい奇観なり。主人試に庭へ人を出し往来  
 せしむるに、その人の目鼻衣服の模様鮮かに写れり。又庭に子供の  
 手習草紙干てありしが、その草紙の年号の文字鮮かに読るなり。み  
 な人明鏡に向ふか如し。これ日かげの自然と照しあふものにして、  
 よに類あふべからず。唐土にも稀にありしにや曝畊録に塔影のこ  
 とあり、又酉陽雜俎にもこれに似たることみへたり。  
 ○こればかりは茶な事ではなし、実録なり。皆様その気でご覧じ  
 ろ。

○近頃親父がふとみつけだしまして、おひく見物が参られます  
 故、紙も節穴の高さに貼ておきます。あまり穴へ押付ては写り  
 ませぬ。四五寸も前の方へ紙をおきますとよく写ります。



へ先生、此影の和文をねがひます。

○奇妙く、こゝは実録だけ書入も真面目でおきまじやう。ア、一  
つしやれてへナア。

○ときに御主人、近ころは狂哥が別して御上達ね。

へとかく天氣のよい日中か別して鮮かに映ります。かやうに  
閉込て暗くいたさねは節穴より日かけが届きませぬ。

〔二ウー三オ〕

出ずともよいに兎角出たかるものは疝氣持のおならなり。又いくら  
いけんでもすぢつてもひよつと出そこなふとからきり出ぬものは  
草双紙の趣向なり。作者もひよんなことか商売になつて田楽屋の  
辛子ではないか否ても応でもかゝねはならず、段々日足は鴨の足よ  
り短く夜は鶴の首ほどなが月のすゑつかた、本屋からは毎日の立  
催促、今年は百日あまりの道中をしてようく帰つた当座なれば、  
用は煤掃のごみ溜程たまり、硯に向つても尻が坐らず、氣は焦く  
趣向はなし、紺屋のあさつてとは違い、作者のあさつては照降にか  
まはねば、そうくは言「訳もならず、せんかたつきて或夜つくぐ

〔二ウー三オ〕



と机に向ひ、何を書ふと思案沈吟たる我影をふとみれば、岩に鷹のとまりたるがごとし。こゝにおいて彼の三州の朝倉三笑か家に写ることを思ひだし、まづなにかなしにかけひなた珍文図彙と題しだんくこじつけたること左のごとし。

此絵組はどうやら起てゐて夢をみるやうだが、夢ならば二鷹で言分なし、もし夜鷹だと意気地アねへ。

へ作者の影法師が鷹にみへるゆるゑ、本屋の提灯までが鶴にみへるやつよ。

へいつもく同じ御挨拶では帰りまして親方に申わけがござりませぬ。御苦労ながら少くでも遣されませ。などゝ小僧掛取の正本を書抜の通りならべてゐる。

へ鶴屋の小僧どん、あさつてはきつと種本をお渡し申す、違へねへのまん中の巻がいま下書最中だ。

## 〔三ウ〕

芝居山の天辺に三がい松あり。男松なれども女松のごとくみゆる。およそ此松を太夫といふことも此三がい松よりいでたり。むかし中臣の慶子といひし人此松を京鹿子娘道成寺に植移して終に名木となれり。木のかたち笠踊のごとし。この木陰にて長唄をうたひ、ちりからにて囃せば枝自から動きて踊るに似たり。

へ工面と算段はいづれかねやらひなしやら、わけていはれぬ瓜のかたさよゑ。

へひらの煮蛸は芋でやはらぐ、しきしき焼につどふするめは、たれと煮染のすぎばし

かさをどり

か三がいまつ

へやんやく。いたつて古風な賞めやうだ。

〔四オ〕

又米俵かしあけ村に力持の木あり、その形さぼてんのごとくにして、木よりしきりに汗をかくなり。往来の人必ず立止りて此木をみる。この木影にあさく烏むらがりて遊ぶ。だい一この木のふしぎは時として二三本一所に生ることあれど、おほくは一本立なり。盛りいたつてみぢかし。たばこ二三服ばかりのむ間に風も吹ずして中よりほつきりと折るとき、地びたにどつしやりといふ音をする。

ちからもちしまはねへとしよげるもんだ。こゝが野暮天にた場所だらう。

カ さぼてん へ初会の盃とこめだはらは初めにぐつとさして。へもうちつとだぞ、ぐつとつはれく。

〔四ウ〕

そぼく雨のふる時は坊主会羽といふかつば出ることあり。此かつばは両の腕がなくてのつぺらほんにて火見櫓のごとし。道中などにて常に出あふ人ありといふ。道中にて見るものはせむし多し。

〔三ウー四オ〕



此かつばの尻をかぎし人ありしに、至て油くさしとなり。毛並は  
 みな黄色なり。毛色黒きは形はなはだ大きく、好んで馬にのるな  
 り。いづれも人を化すことなし。たゞ雨のふる日うそくと出歩く  
 のみ、天気よき日は決していす。

ぼうずがつば へタぐれにそぼくとふる雨がつば泥のかゝら  
 ぬしりの用心 ア、しりごだまが食ひたくもなんともないなア。

へむかふからくる坊主がつばは道者の婆様とみへる。三途川の  
 婆つ様でなくてめつけものだ。

カ  
 ゲ  
 ひ  
 の  
 み  
 や  
 ぐ  
 ら

〔五オ〕

○むかし湊川のほとりに久米平内ぶねといふ舟あり。みな石をも  
 つて造れり。舟の帆は袴の如くなれども終に波の上を渡ったこと  
 もない舟なり。縁遠き女この舟に文をつけて祈ればたちまち縁付く  
 ことあり、舟は早く向ふへ着くを勝とするもの故、かたつくゑんづ  
 くのひゞきを祝して祈るなり。縁づいたものは御礼のため其身か  
 ならずおまつりをわたすなり。

〔四ウ〕〔五オ〕





くめの平内 へおれをば婚礼の慶安たとおもふさうだ。いづれ

承知だ、おつとよし。

へわたしは外に望はねへ、たゞ男ぶりがよくて金かたんとあつて女ぼうをかはいがるをとこを持せておくれ、そして舅姑があつちやアいやよ。

カゲ ほかけぶね

〔五ウ〕

あんまさんご療治よりよりもみなんしといふ紙いづる。この紙舟に折てはなはだよし。又この紙にて肩をたつき腰をさすれば、身中のんびりとしてよく寝られるなり。すべて気の凝、肩癖、道中のくたびれなど効能そつこうしにまされり。

へちと中腕がおはりなされた、心下痞硬してせうふくじんのおしやうに交じましては、むつかしうござります。赤貝などはおつゝしみなさい。

あんま

カゲ かみのふね

〔五ウ〕 〔六オ〕



へとかく腹に力がなくてはらわた難儀いたす。

へ狎がいはく、おらが旦那は本妻と妾の据膳をくつたあとで、鰻や卵をくはつしやるから、何のことはねへ、大根おろしで地黄をのむようなものだ、ばかくしい。

〔六オ〕

めだか川にひえまきといふまきの木あり、木のは納豆えぼしに似たり。夏五六月いたつて暑き日、これを縁側におけばはなはだよし。此木陰に胡粉塗の鷺おりることあり、このはをして子ともを遊はせればよく遊ぶなり。冬になれば枯れてしまふとみへて、寒き時は此はをみす。こやしには赤ぼうふりをいれる。又もみぢつゝじなどの宿り木生へる時は今戸焼の五重の塔忽然とあらはるゝなり。

へはなをそろへて歩くものゆゑ、上方ではめだかのことをそろといふとさ。

○観音さまへ参つたら、そろでも金魚でも買ってやりまじやう。

ひえまき

カゲなつとうゑぼし

へ坊や魚を見や、手ゝをいれてかきまはすと怖るから遠くから見や。

〔六ウー七オ〕

じやうちうたいくつしろくしんの社にひま茶釜といふ茶釜あり、薬灌は禿頭のごとく、薬灌の口煙管に似て折く涎がつたは

るなり。むかし、とうめへつたこうめへつた隣の婆さん茶をまきし  
 時、この茶釜を明暮茶吞友達とせしとかや。この葉漙の口からたば  
 こをつきこめば、しりから煙を出すまで吸ひこむ。一体はなはだ尻  
 が重く、めつたには動かず、茶をくみこめば何杯でもいやといふこ  
 となし。

○庭の国つき山のほとりにとひきりといふ桐の木あり。その形蔭  
 に似たり。「あふらげをたつさへ、うかく此木のほとりをとほれば  
 忽ちその油揚げがなくなるなり。これを丸桐のそん木といふ。この  
 桐を切て琴につくれば、その音とんびの巢立のごとし、又下駄につ  
 くれば日和を告げるふしぎあり、つねに此はに虫がつきて風のふく  
 たび落るなり、これをとびきりのはえらみといふ。

○やつこの山中左ゑ門じゃアねへが、いくら力んでみてもとうふへ  
 浚つてゆかれては、ほんにあふらげ四まいをつけた穿索だ。これで  
 昼食の菜の物にも生別れといふ身の上になつたはへ。

うしろむき

へなんぼおれが暇で遊んでゐるとて、をりくば、あどんが燻  
 すにはこまる。

〔六ウー七オ〕



カ  
ヂ  
ヤ  
ガ  
マ

へかしらはやくわん、体はちやがま、なく声おやちに似たりと

は、とんだ茶釜な化物もあればあるもんだ。

へ沸た薬灌になせ薪くべる、まきが燃れは茶釜ちる、はれはど

んどこな、おきやアがれ。

へおのれとんびめ、廿四文ぼうにふらせおつたな。このくらい

なら昨夜夜鷹でもおごればよかつた、さんねんく。

〔七ウー八オ〕

おいらん国にじよろねこといふ獣あり、毎晩諸方のどら猫とさか

り、つねに三つ蒲団の上に寝て、夜は寝ず、よく人を化すなり。こ

の猫にみいれられたるもの、軽きは身代を棒にふり、重きは命を

失ふよし、なんぼう恐しき物語をきけり。若猫はよくじやれ、と

も至てねごし。北国に住むものは尻尾前にありて二股にさけた

り。」鼠はとらずして大そうをくつてみたがる。苦界十年の後

有頂天にのぼりて花車と変じ、或ひは山の神となる。

○てのある客のてをくつて挿子木野郎にした噂は二十年ばかりむ

〔七ウー八オ〕



かしのことだ。

けいせい

カゲねこ

客人はから下戸たとき、から猫なら麝香の匂かしそうなも

のだに、いがらしの歯磨のほびがしいんす、好んにやア。

へみけのや、はやく茶碗と箸箱をもつてきや、帆立貝が煮着て

しまうそにやあり

へねこじやくとおしやますか、ねこか下駄はいて提灯ともさ

せ打掛姿ででるものか、ナントこの書入はあたらしからう、はや

りうたをこう久しくおぼえてるれば得なものだ。

〔八ウー九オ〕

だるまさん九年寺の什物にかぼちやの火入といふものあり、そのか

たち木魚の鯨銚立をしたるが如く、この火をとって坐禅豆を煮ば九

年おいても味ひ変らず。又この火入にて達磨膏薬を煉ば、尻のくさ

れたるに妙なり。

又此火入ころんでもよくおきるゆゑ、火をおきといふもこれよりは

〔八ウー九オ〕



じまる。

○むかし元弘のはじめ、田樂法師といふ名僧一本の竹をもって大入のもじをかきたりけり。その筆「法はなはだ危くみゆれども、一たい釣合よく、てをはなれたる名筆なり。その、ち京都は四条河原、大坂にては道頓堀、伊勢は白子の観音にて、たびく開帳あり。今かるわ山ほねな寺の宝物となりし。大入の二字いたつてめでたき文字なれば、此宗旨にては甚た珍重するなり。

○ハイトウくさてくくその次は達磨大師のざせんまめ、鴨の煎鳥小鍋たて、鮎のこぶまき、ほうろく煎、骨やはらかな放れ業、まづこれまでは上按配、どつとほめたりく。

かほちやの火入

かだるま

へかほちやの火入だけ煙草もちと大味にのめる。ひとりもの、うちに消炭がなく、湯屋の番頭が固炭の火には生涯あたらねへものた。

へ団炭でたばこのみながら、棟割の引窓から雨垂の音をきいて、寝るも気散じなものだ。

へこうかゝとがあきなすのやうにゑんてきてはかほちやの火入にしがみついてゐるよりほかしかたがねへ。

へ口上にしたがひ、次第に竹へつたはつてまいる。これか竹田の大軽業でござい。

かるわび

カゲ大入

〔九ウ〕

山陽道持経が池に洞突の杜若さく。風吹はその花すれあひて蚊のなくような音かする。これ不審なり。此かきつはたを切てその跡へ蔵を建れははなはだしやうぶなり。むかし在原の業平朝臣此かきつばたのもとにて

○くらふしんきやりなれにししごとあればはるぐのほるとびをしぞ思ふ とよみたまへり。

へしめてよいもの何くぞヨイく 帯のしやらとけかしはめんどり さて又小むすめ派手なごけヨイく くちをしめるが袋にしぶ柿に夜さりな四ツじや くゞり戸しめるヤア―

だうづき

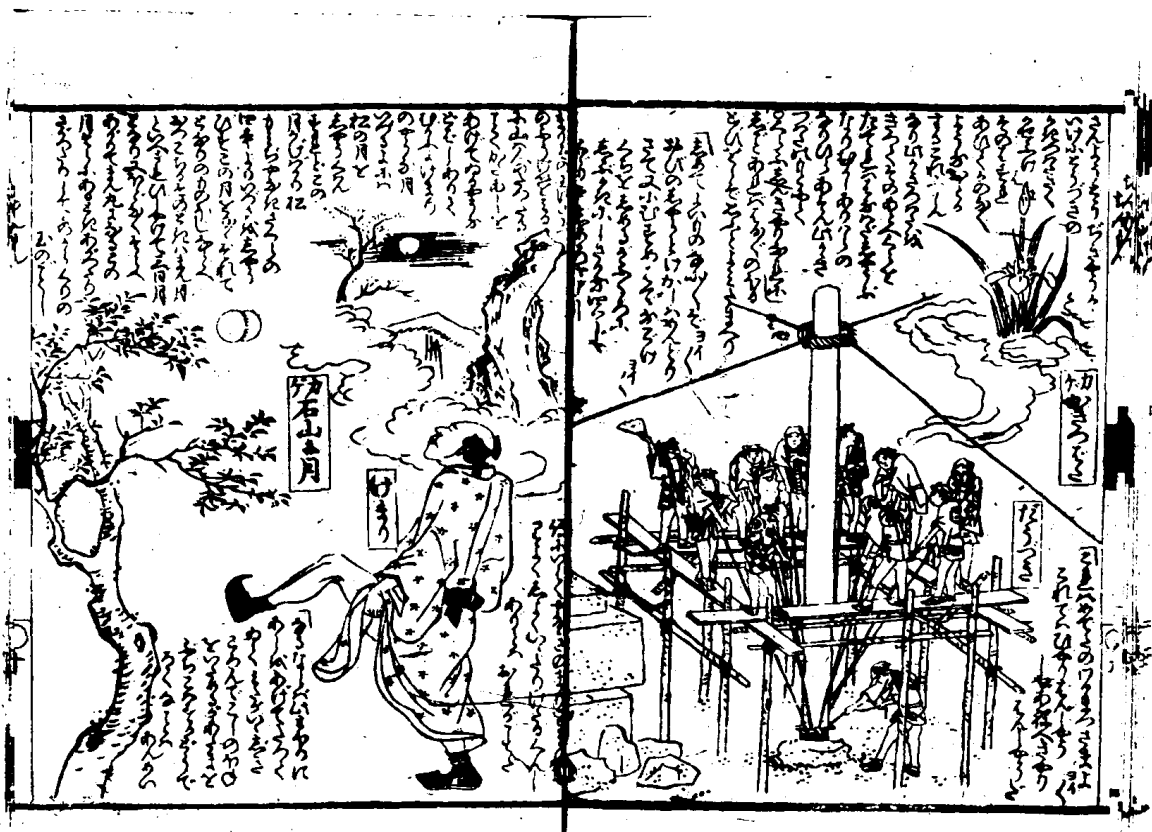
かかきつばた

へこれは目出度のわかまつさまよヨイく これては火遣番匠じやあねへ、さやりはんしやうだ。

〔十オ〕

まりばの国けこ山の風景をみるに、山は人の立たる如く、片足をあ

〔九ウ〕 〔十オ〕



げてゐるやうな土橋ありて、むかふに蹴鞠のやうな月いづる。世に  
 は松の月を賞玩すれど、この月かげばかり松もみち柳さくららの四  
 季よりいづるを賞美す。この月をりくそれで隣の物干などへお  
 つこちる。その時は満月といへどもひしやけて三日月となり、又ほ  
 どなく空へあがりてまん丸になる。この月そらにある時あがつたり  
 さがつたりして、水からくりの玉のごとし。

けまり

カ 石山に月

伝にいはいく、やなきのまりをみるに緑色いゝたり。蹴たる君子  
 ありとはおれがことた。

へなるならば此とほりに足をあげて立ててみたがいゝ。じき  
 転んで腰のほねをいためるか、頭をぶちこはすか、どうでろ  
 くなことはあんめい。

〔十ウ〕

いかたの宿丸太川のほとりにこぐさぎといふ鳥あり。くちばしは  
 竿のごとく、からだはまつくろに日にやけて、目ばかりひかり、水

〔十ウ〕〔十一オ〕





になれたるものなり。この川なみあしき時は大丸太を藤蔓にてからげたるが如し。これを筏のふちなみといふ。又風の吹さる時は竹をならべたるか如し。これをたけいかだの笹なみといふ。

へしほくとときはにまよふなごみの、いづくをさしておもかぢか、しるべの歌は定めなき、これは頼風船頭の段だ。

へいかだ漕くまでわしや九十九まで、こうはいつたかあとがちとぢぐりにくい。しはらくかんがへていふべしだ。

いかだし

カ  
ゲ  
サ  
キ

〔十一才〕

つくはつた口上川にいとまごひしてかへるといふ虫あり。からだふくれてどたくし、何をいつてもいけしやあくまぢくとしてゐる。あるひは神仏を礼拝する時、又はさゝり回向の時などこのかたちををりくみる。切口上にて人とさし向ひ、話をするときはあまいぬこまいぬの如くみへることあり。

へかいるひよこく三ひよこく、あわせてひよこくむひよこく、をとこなら此とほり四五十へんもいつてみたがい。

じきに口が酸くなること奇妙だ。

つくばつた

カ  
ケ  
カ  
ヘ  
ル

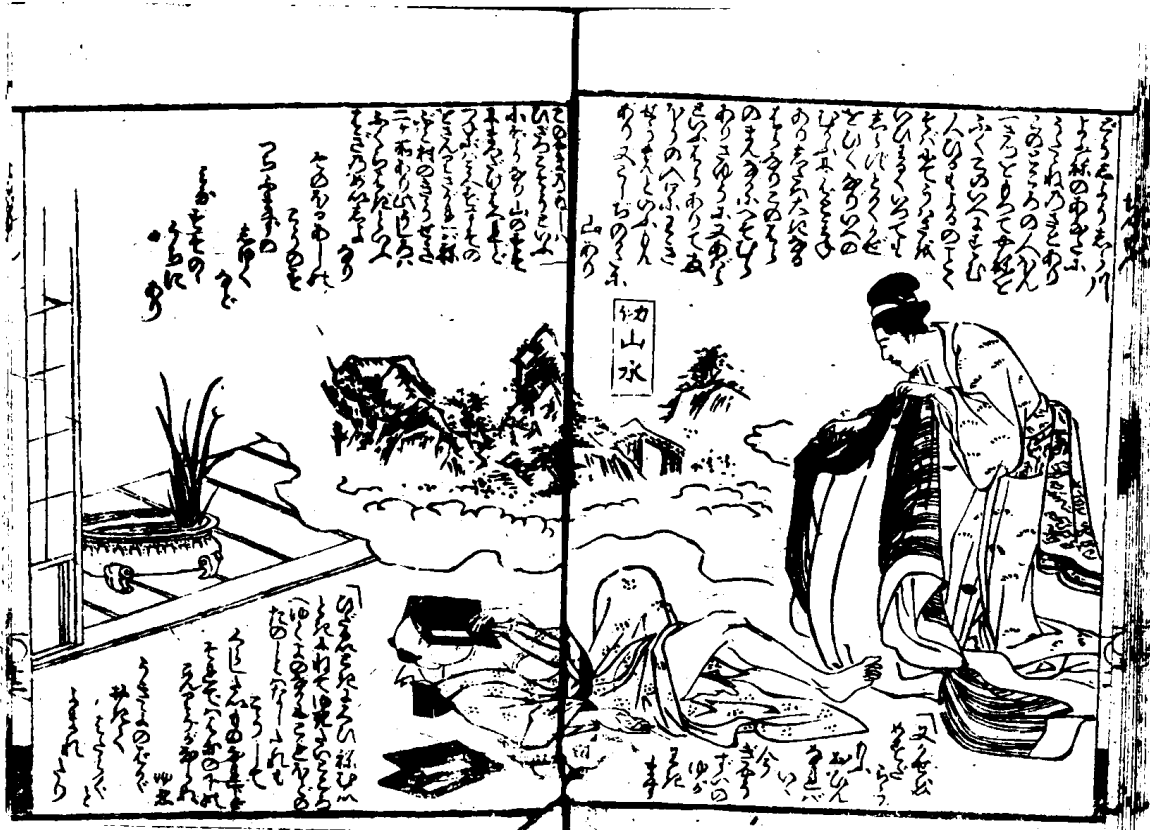
へびぎて歩ひてまかりいでゝさへ口上をけつまづきたがるもんだ。とかく足もとより口もとかんじんだはへ。

どうしよう白川夜舟のあなたにうたゝねの里あり。この所の人本  
 一冊をもつて屋根をふく。この家にすむ人昼も夜の如く、そばにて  
 噂をいひ、わるくいつても知ず。とかくかぜをひくなり。家の向ふ  
 にはとみねあり、しさいは大きなるはらなり。このはらのまんなか  
 にへそむらあり、左右に又あばらといふはらありて、両方の入口に  
 脇せうもんといふ門あり。又こしちのかたに山あり。「この山の主  
 はひざつこぞうといふ小僧なり。山のすそにまつだけ生れど常には  
 みへず。すそのを三里さがればねぶと村のきうせき二ヶ所あり。此  
 うしろはふくらはぎといふ萩の名所なり。  
 そのほか、足のこうのす、つちふまずの宿など、みなすそのう  
 ちにあり。

カ山水

へ又かぜをめすだらう、もふおひんなればいゝ。今ぎやうずい  
 の湯がわきます。

へひだるいときに食ひ、眠いときにねて、ゆきたいところへゆ  
 く、世の中にこれほどのたのしみはなし。誰もこうして暮し



たいものなれど、それでは鼻の下の建立がならぬゆゑ、うきよのばかゞ起てはたらくと詠まれたり。

〔十二ウー十三オ〕

西国三十三ばん絵合の図に、巡礼ぎくといふ菊あり。花はすげがさのごとく、葉は白きあり赤きあり又青きあり。白きと赤きは笈摺のごとく、青きは袖に似たり。幹は白くしてきやはんのごとく、枝はぼうのごとく、つぼみはひしやくのごとし。此はなを折て観音へそなへる。いにしへの歌人、このじゆんれいぎくをよみたる名歌「百首ありて世に名高し。

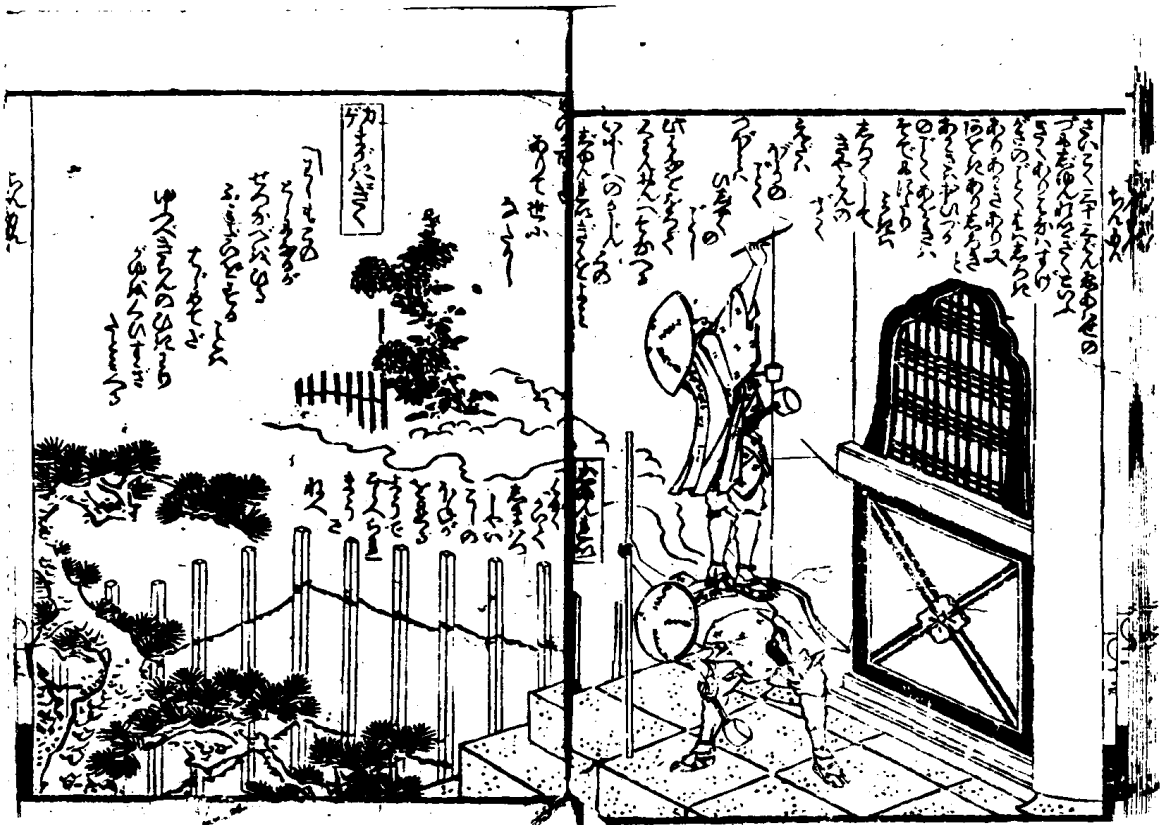
じゆんれい

カマがきぎく

へわしもこの年になるが、せつなべをひるふみだいをすること  
ははじめてだ。ゆふべ木賃のひきわり粥をくひすぎたとみへ  
る。

へはやくかいてしまはつしやい。こしのほねが折るようで、こ  
らへられまうさねへ。

〔十二ウー十三オ〕



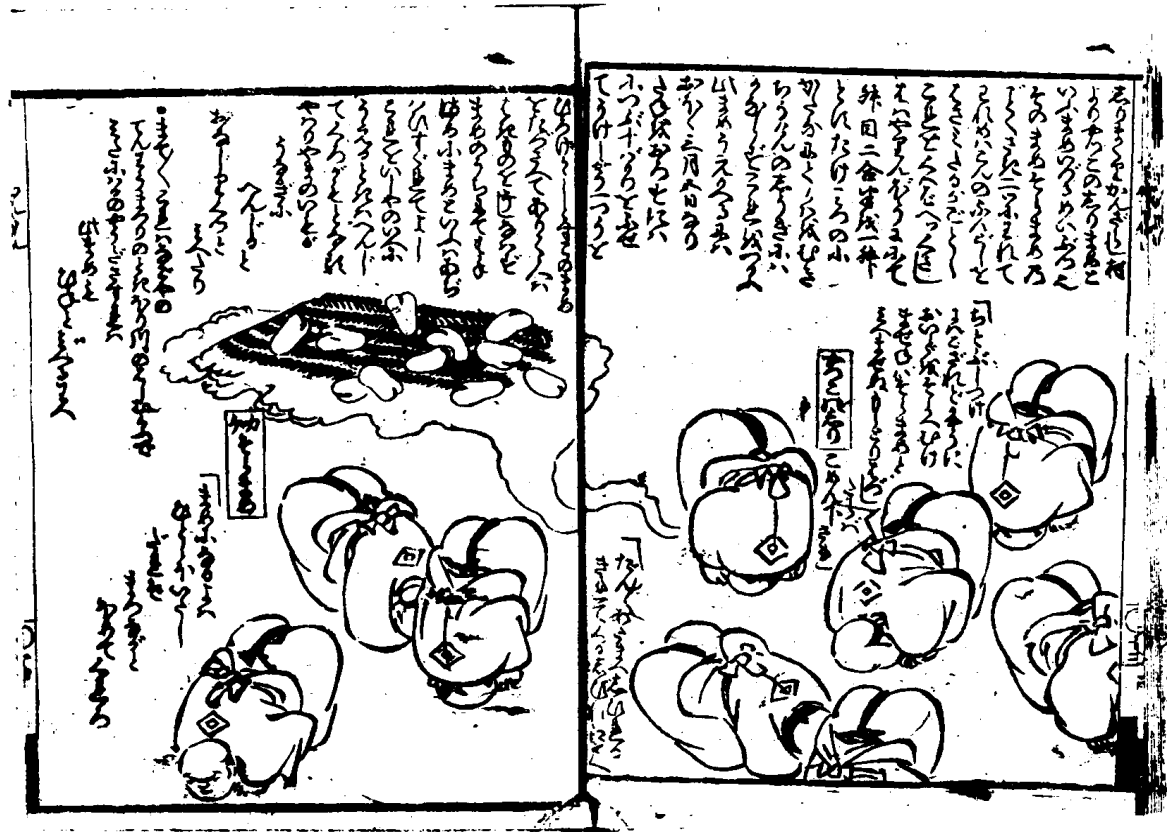
しりまくりかんざらし村より奴のしりまめといふ豆いづる。めいぶつ也。その豆そら豆のごとく先二つに割て、われめは紺のふんどしをはさみたるがごとし。これをくへばへっくさし。葉はやりんぼうに似て升目二合半を一升とす。竹光の小かたなにて皮をむき、ちうけんの祝儀には必ずこれをつかふ。此まめ植替るには多く三月五日なり。種をおろすには小つぶ十ばかりをふせて、請状一通を「ひろげかゝしとす。この豆をたづさへて歩く人は履物をうしなはず。まめのうちにても手まめ小まめといふは味ひすぐれてよし。これを医者いしやの家に植うえる時は、変へんじて黒鴨くろがもとなる。やはり山やまの芋いもがうなぎにへんじるとおなじ理屈りくつとみへたり。

○まてく、これは名古屋なごやの天王祭てんわうまつりのとき、堀川ほりがわの橋向はしむかひでみた俄にはがのやうだ。さすれは此まめもひねとみへるわへ。

やつこのしり

カゲそらまめ

へちとぶしつけにはござれど、かやうにおいどを空へむけませ



ねばそら豆とみへませぬ。もしとりはづしたらば御免下され。

へだんくあたまへしひれかきれてくる。しびれ江戸へくだれく。

へまめになるよはひとしほいたし、だれぞまつながとほめてくれる。

〔十四ウ〕

へむかしは屋台見世に団子と共にくわせし身も、にくうせしみも今はからとなつて、犬のふんと住かをおなじふす、ア、ラ  
ゑんぶこひしやなア。

○まよふたの国もうじや郡ぢごく村血の池のほとりに生るとうもろこしは、かたち女の幽霊のごとし。墓原卵塔又は古戦場荒  
屋敷などにしせんとできるものなり。日本廻国の修行者をりく此とうもろこしにでつくわせることあり。此ときは必ずなま  
ぐさき風ふきて、鳴子の音ひうどろくと聞へ、もうしくとよびかけるやうに聞へるとなり。

ゆうれい

か  
と  
う  
も  
ろ  
こ  
し

へ香ばしきにほひ馥郁と薫じ、ちゞれ髪の婦人忽然とあらはれしは、さてはとうもろこしのゆうれいであつたか、なたまめ  
だぶつく。

○とうもろこしのゆうれいなら、故一官の李夫人かもしらぬ。

〔十五オ〕

九月神明の生姜市に千木箱小ばんといふ小判通用す。小ばん一  
包の厚さおよそ百両ばかりの高さありて、内にはすあめ十ばかり  
あり。すべていびつなるもの、おかはめしびつのだぐひ、かたち小  
判に似たれどもはるかに大きし。たゞちぎばこのみその大サ小判の  
ごときものあり、これをちぎばこと思へば小どもは茶にしてもら  
ひ、これを小判とおもへば親父も心をうごかす。

一さいのものみなかげとかたちのごとし。悟れば小ばんもちぎば  
ことみへ、迷へばちぎばこも小ばんとみゆる。たゞさとりてもさ  
とりがたきは此さかいなり。

ちぎばこ

カ  
小ばん

へ此ちぎばこが百両包ならはなせるはへ。

へとつさんや、おらア又このちぎばこを雛さまのお廁かとおも  
つた。

〔十四ウ〕〔十五オ〕





信濃賓客

浅草主人

俟待開帳話

〔二オ〕

〔振仮名・句点・改行原文のまま〕

年々歳々腹相似たり。歳々年々脾腑同じからず。

猫児三載はじめて弗狂。戲編十稔終に一変す。予

筆墨をもて遊戯する者十有三五年。近曾自ら

その戯に倦。假毫を箆にして。天窗を雷盆と、もに

割るとも。唐土の李卓吾。羅本中。覺世道人。施耐庵。

さて又日本の柴家清女。降て西鶴。文流。近松。

其爪先へも倚がたし。三十余年の非を知て。止様としても

止させぬ。書肆の催促。無理往正筆が難の世の中じやナア

享和三癸亥正月

曲亭馬琴誌

〔二ウーニオ〕

くれ竹のせまき臥所に寢覺をあかしかね、道祖神にやさそはれけ

ん、神風の伊勢の宮居拜んと五月雨のころ俄に杖よ笠よとたちさ

〔二オ〕



馬琴戯作  
享和癸亥發行  
樂橋通油街  
仙鶴堂梓行

信濃賓客  
浅草主人  
俟待開帳話上



享和三癸亥正月 曲亭馬琴誌

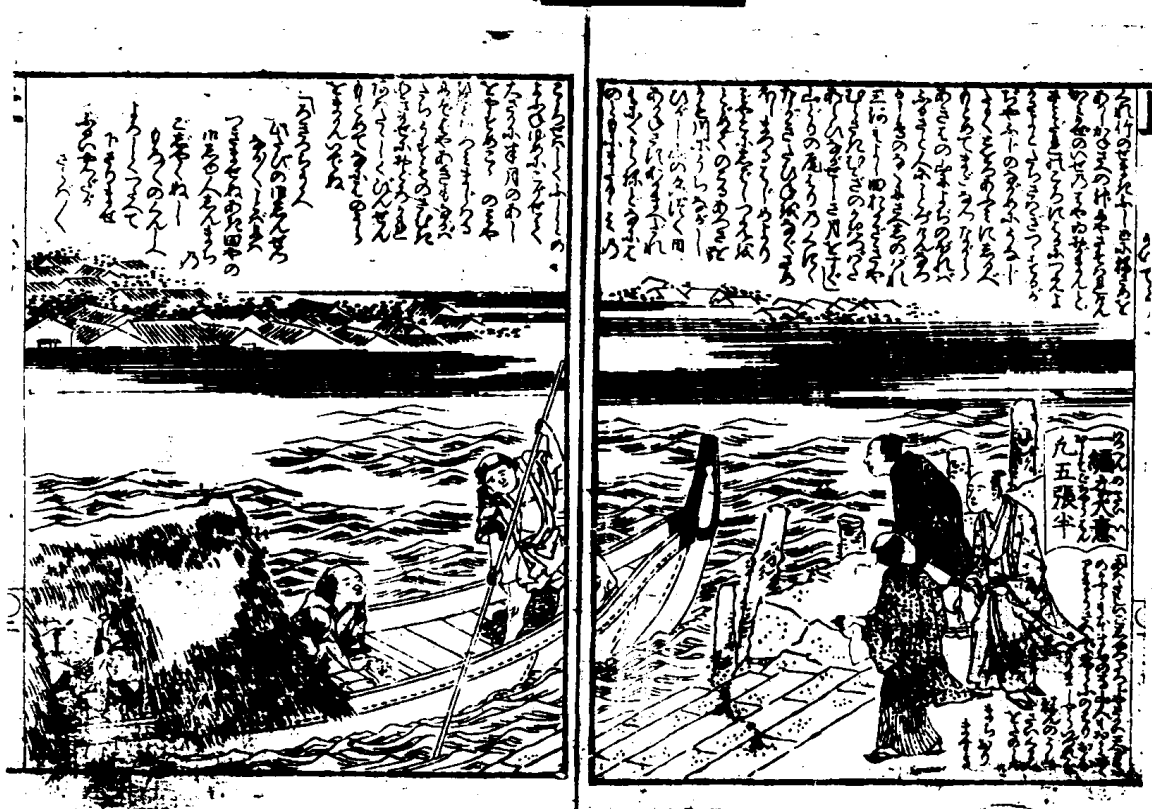
年々歳々腹相似たり。歳々年々脾腑同じからず。猫児三載はじめて弗狂。戲編十稔終に一変す。予筆墨をもて遊戯する者十有三五年。近曾自らその戯に倦。假毫を箆にして。天窗を雷盆と、もに割るとも。唐土の李卓吾。羅本中。覺世道人。施耐庵。さて又日本の柴家清女。降て西鶴。文流。近松。其爪先へも倚がたし。三十余年の非を知て。止様としても止させぬ。書肆の催促。無理往正筆が難の世の中じやナア



はぎつゝ、駿河路や富士の眺に項たるく、遠江にしるべもとめて  
 まだ夏ながら秋葉の山によぢのぼれば、故郷の人にことづけんなつ  
 かし鳥の鳴くにさへ惚れ、三河もよし田岡崎や、むらさき麦の  
 杜若、洗ひ流せし五月をすぐし、山どりの尾張の国、ながき旅寝を  
 ながさめ、星祭るはじめより都にしばし杖をとめて、残る暑さを  
 鴨川にうち流し、東山の夕づく日、あかねさす赤前垂もにくからね  
 ど、難波の友に待るゝ身の「心せはしく伏見の夜船、夢にこがせて  
 大坂に半月のあしを休め、このみやひと睦み交るにぞ、はや秋も  
 半ばたち、薄物さむき秋風におどろかれ、あはたしく便船もとめ  
 て難波の浦を罷んいでぬ。

へ盧橋老人 此たびの御しんせつなか／＼ことばにはつきませ  
 ぬ。秋田やの御しゆ人、新町の吾雀ぬし、もろ／＼の君子へ  
 よろしくつたへて下さりませ。ふるいやつだがさらば／＼。  
 へあはた、しいご出立じやさかい、天王寺の蕪も本町の鳥山  
 人もお見送り申さいで、ゑらふ残り多がりまじやう。いづれ  
 近年のうち再会を楽んで待おりまする。

〔二ウー二オ〕



一編之大意  
およそごちやうはん  
凡五張半

〔二ウー三オ〕

旅路は牛の角文字や伊勢の二神ふしおがみ、山田松坂の音頭耳におもしろく、古市の夜の眺目にめつらしく、つゝみせこの松坂屋料理鯛の鮮きに口果報あるもうれしく、湊の町のながき夜すからを明したる兵丹屋より走り出、駒のはづなを早めつゝ、桑名の宿の蛤もあへばにくからぬ友どちに止められ、二日雨ふり風ふきて、宮舟はきれものなれど鞘へまはりてけがもせず、夜を日に継いでいそぐほどに、八月の末つかた故郷近う辿りつきぬ。高輪もすぎて芝口にかゝる道の「傍」に立てたりし高札に人の集ひよるあり。何ことぞと近くよりてみるに、信州善光寺の開帳の札なり。此御仏は廿六年以前両国回向院にて拜まれたまひ、世にたぐひなくはやらせ給ひしは馬琴が十二三のころにてありけん、此度は浅草にてみ開帳ありといへば、如来と申、大寺と申し鬼、鉄棒はやらせ給はんことは疑ひなしと随喜の思ひことさらにして、ゆくゆく我家へたどりつき旅

〔二ウー三オ〕



はゞき解く夕には百日あまりの道中づかれに前後もしらず寝たり  
けり。

へ来年の開帳には何ぞ銭儲けを案じまじやう

へヤレくうれしや久しぶりて江戸の土をふむぞ、コレぬけ介、

田町の反魂丹をわすれぬへによ。

此お開帳にはこんどで丁度三度あひます。ナムアミダク。

〔三ウー四オ〕

すでに其夜も丑三ごろ馬琴が門を慌しくたゝくものあり。ほゝヲ

あやしや小夜更て門の戸たゝくは何者ぞと立いでみるに、先年

善光寺の開帳にて落をとりし鬼娘、千年もぐら、とんだ靈宝の玉子

和尚、鬼娘大ぜい連にてしけこみ、みなく口をそろへて申やう、

さても此たび浅草の御境内にて信濃、先生御開帳がござりますれ

ど、とても当時の流行におくれたる我くなれば、昔の全盛思ひも

よらず。されどその古は見世物仲間で一二を争ひしことなれば、

せて貴方の御作の草双紙に一丁の埋草になりとお書入くださら

ば、見世物冥利此身の本望何ごとかこれに如んと、鬼娘の目からは

〔三ウー四オ〕



涙、もぐらは穴へも入たき風情、よにしみぐくと頼るれば、馬琴もまんざらいやとも言れず、切角のお頼み、一先工夫いたしてご挨拶に及びましやうなど、金貸のいひそうな挨拶をして帰しけり。

来年の開帳に今年の盆過から、なみ木の店がふさがる手まはしのよい世の中、今時鬼娘といつてはとても鬼坊主ほどにも落はきますまい、きのどくらしい。

へたまご和尚も今度で三ばいめはちとうるさいね。

へ今度私が見せものにてる時は千廿六年もぐらと言ねへけりやア年代記の勘定が合ねへ。

へおにむすめも廿六年みぬうちに白髪婆になつたやつさ。

〔四ウー五オ〕

馬琴はかの手合が帰るや否や門の戸ひつしやり、枕引よせすやく眠る、その折から近江源氏の舟場の如く又も門口ぐわたくく、馬琴はきくより突立上り、こりやく女房錠前より報せのものまう、ソレ奥の間の掃除せよ、子僧らはそこにと寝かしおき、門のくゞり戸引開れば、外よりぬつと大二王、糸の平内雷神風神、隨身門の

〔四ウー五オ〕



大臣、出世弁天文箱地藏、御相談と呼りく、勝手狭しと居並んだり。コハ音高し二王どの、シテ開帳の様子はいかに。テンツテンくさん候、奥山にたむろを構へ、相談を催す所へ近所の商人どつと押寄せ、こゝはわれらが定店なり、まづ大ほやから追まくれと二王をとつこに取囲み、唾だらけの紙鉄砲ふきかけく追立られ、お宿を力にまいつたり、どうぞよい錢儲のご工夫あらば、一口のせてたび給へと、大いき吐てものがたる。

へ馬琴くわんくとうちみやり、ホ、折角のおいで、何がさて深ひ趣向もなけれども、二王はさしづめ力持、矢大臣は「楊弓場、雷神は雷おこし、平内どのは軽業の口上言、弁天さまは茶店がよし、風の神は団扇売、文箱地藏はさしあたり趣向なし地、と、めいくの役割を定むれば、みなく大きに力を得、浅草さして立帰る。

へモシわつちらがコウならんだところは、ばけものやしきの六歌仙といふものだ。

〔五ウ〕

久しぶりにて江戸へ帰り、今夜はゆるりと寝やうと思ひの外、いろくのこと寝かされず、もふ七つでもあらうかと小言いひく門口を閉んとしたるその所へ、馬琴が壁隣の亭主桑名屋無右工門といふ男、商売が提灯屋なればとて夜更寒気も遠慮なく、用ありさうにねじりこみ、さても此たび善光寺の開帳に奉納の提灯を仕込で売るつもりでござります、絵柄模様の趣向をご工夫下されと、もつともまじめで頼みかけられ、さすが馴染の仲なれば、こればかりは茶にもされず、ながなはのうなぎ針ぐつと吞込でうけあひける。

へとかく今の浮世は四文銭を三文つゝに売るより外に、早出回しな商ひはござりませぬ。

へとてもものに利があつて、買手が喜んで資手がかゝらず、金の儲る絵柄の御工夫をあらまほしふぞんじます。

〔六オ〕

馬琴は開帳騒ぎにて江戸帰の一夜をねそびれ、もを六つの鐘もなれは寝るには遅し、起るには早し、そちこちすれは夜もしらぐと明わたり、独り床のうちにまぢくと桑名屋が頼し提灯の雛形を案じている所へ、表の障子をくわらりと開け、ハイおたのみ申ます。油町の鶴屋から参りました、一昨日は滞りなくお帰りなされておめでたうぞんじます、当年は久くおるす故、草双紙の仕込も大きに遅れました、せひく一兩日中に一組お書上下さりませと、三寸釘の問屋の催促、こればかりは否応ならず、幸い無右エ門が頼の提灯の雛形をそのまゝにどうやらこうやら三冊に丸め了せ、ようく本屋の責をふさぐ。その速かなること物前の書出を書く如し。

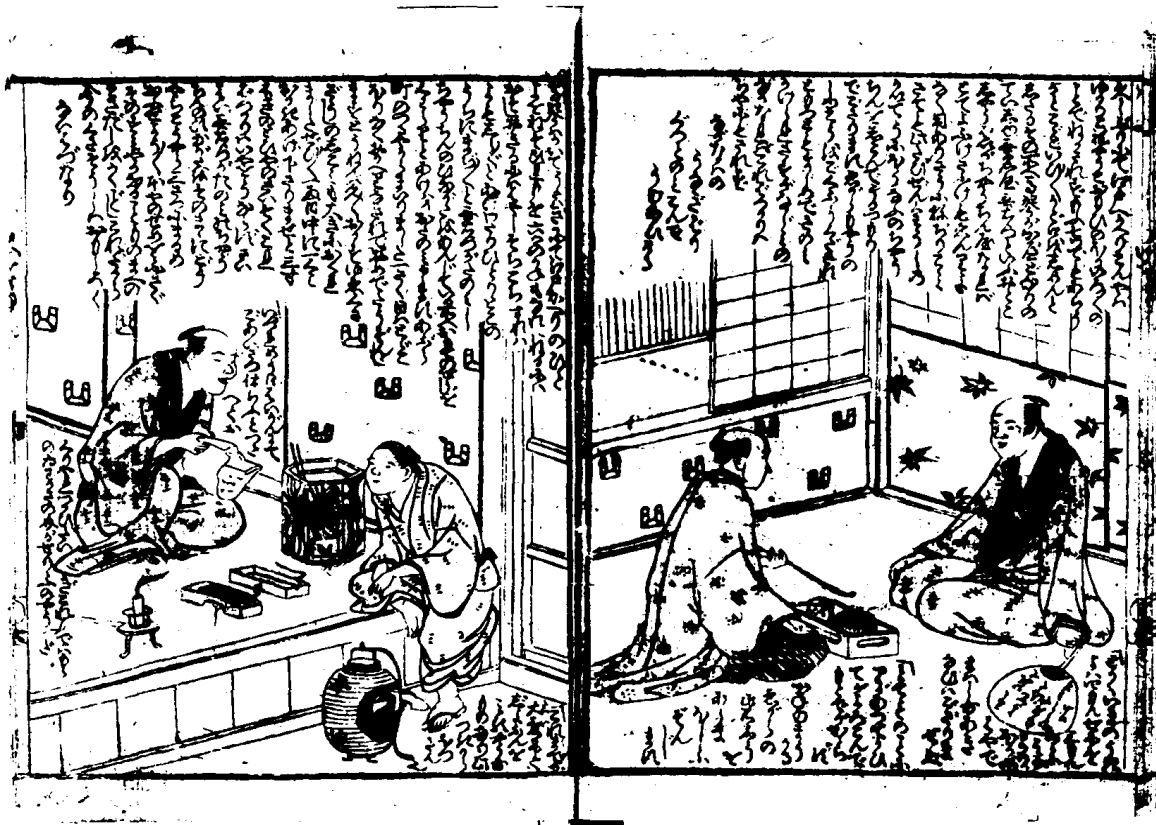
これだから今の草双紙はおもしろくないはづなり。  
へいづれ明日拝顔にてご挨拶仕らふと伝へておくりやれ。使大儀、これでは桃井若狭の介がせりふのやうだ。

〔六ウー七オ〕

発端

光陰のたつこと鉄砲玉に帆をかけたるより早く、明れば

〔五ウ〕〔六オ〕



癸の亥の年を迎へ、春も三月果るころより世間は善光寺の開帳  
 を待兼ね、しゆく奉納の思ひ付とりくなり。されば桑名屋無  
 右工門は待設けたることなれば、並木のあたりへ出店をしつら  
 い、趣向へ引札をまはして奉納の提灯を売抜める。その趣向とい  
 つは、この提灯に飾り願主講中の名を書きさすとも、何商売の誰  
 が上た提灯と、絵組にてくわしく知る趣向なれば、これは珍しい  
 思ひ付なりと忽ち評判よくなり、買ひにくる人逃へる人朝から  
 晩まで押合ひ混合ひ、手間に手間をいれ「ても間に合ぬほどの大  
 繁昌、無右工門たちまちおかまを起し、銭金のつかみ取、これを  
 思へば膝とも談合、手を拱いてゐては儲らず。諸事世の中は沖  
 釣の針の如く、どういふ表裏にて何が当らうとも知す。

俳諧師は芭蕉提灯、むすめの子は酸聚提灯、揚弓屋の年増は  
 弓張が妙でこせへしよ。  
 むかふよりくる小提灯、これもむかしは弓張のはり替ものと  
 知れたり。こいつは忠臣蔵の地口でもなんでもないやつさ。  
 へソレはやつてくるはく、これでは小田原ちやうちん香、  
 外郎売をみるやうだ。



〔六ウー七オ〕

〔七ウー八オ〕

まづ一番に詠への提灯は新川辺の酒問屋、年来善光寺がきつひ信仰、どうぞ今度の開帳にめづらしい奉納ものをしたいとの願望、無右エ門得たりと提灯の雛形を取出して見るに、根が酒屋の頼ゆゑ、提灯の模様はさしづめ山くに瀧水の彩色絵、どんな横つ倒しが見ても、たちまち酒屋の奉納ものと」知れて大きに落がる。

へたかい山からたるぞこみれば、下戸やなまゑのはらばかりハレハどんどゝな、コレハどんどゝな、なにういはつしやる。又いはく、さかやでるく餅屋はうれる、あひの菓子屋はあめがあるホンニわるい酒だせへ、氣に如才もなくつて。へほんに奇妙く、提灯のものを生でおめにかけるとはこのことだ。

〔ハウー九オ〕

さてその次に提灯を詠へにくる人は、下まち辺のうなぎやなり。商売柄とはいひながら、これまで多くの殺生をし、つくりし罪も消やらぬ、その提灯の模様といつは、うなぎの枝に良い酒の極彩色、

〔七ウー八オ〕





これ柳の枝に五位鷺の地口とは絵柄にそれとしらはりなり。

二階のおみやげが、小串が二朱ぶんでます。こいつはまじめだ。

京のいけすの蒲焼と大坂の大庄のうなぎも食つてみたが、どうでも江戸前のはたぎほや大和田にはおよばぬ。

〔九ウー十オ〕

こゝに錠前金物直しをして世を渡る男あり、今度の開帳にせめて何なりと奉納せんとだんく勸化して桑名屋が店へ来り、どうぞ講主は錠前金物直しとみへるやうに提灯の模様をかいてくださいと頼めば、無ゑ門こゝろ得、何のてもなく、あがり花にあげはのちよを二つ三つかいてやる。

この絵組はのこらず提灯が夢をみてゐるやうなれば、所詮提灯のうちへは納らぬゆゑに右の仕合なり。念のため御こととはり申候。

へついでにわたしが心の錠前もなほしてもらわう。

〔八ウー九オ〕



へ錠前は道によつてかしこしだ。こゝがやすりかすりの場で

あらふ。

〔十ウ〕

ある道楽者なんでも一ばん跳た提灯をこしらへ、落をとらんと桑名屋が店へきたり、コウおらアこじつけた悪地口じやアいやだぜ、なんでもかまふことはねへ、すつはりと厭味のねへところを一番かいてくだつしと、手拭にくるんできた四文銭二三本ほうりだせば、無ゑ門こゝろ得、昨夜かいておいた質草に下馬の提灯をだしてみせるに、さすがの中つ腹肝を日和下駄とともにひつくり返し、たちまちに買ってゆく。

へ下うまをつなぐには質屋の観世縁がよし、綱をゆるすと勇みたがるなり。

へからだは二ほんつうようの裕、足はしごき、尻尾は芯ばかりの帯、なく声ア、酒がのみたいとは、ハテかはつた馬もあればあるものじやナア。

〔九ウ—十オ〕



〔十一オ〕

ある外科医者、家業繁盛のため善光寺の如来へ六十日の日参をせんと立願し、結願のため先提灯を奉納せんと桑名屋へあつらへけるに、これはさしづめ外科医者なれば、すひふくべに大なまづをかいてやる。その絵組田町の髪結床の障子に似たり。

へ尻を重くしてのらくらしたがる、えてなまづができたがり申す。うなぎかできると筋を割ねばりやうぢができません。

へ外科は評判でかゝらつしやい、かうやくつて歯につかずだ。

へおれが頭も月まち日まち、代脈やたむしに困る。法印さんとまちがひさうだ。

〔十一ウー十二オ〕

こゝに又夏は団扇を売り、秋は短冊竹などを売って世を渡る男、現当二世家内息災のため一つの提灯を奉納しけり。これは商売が二色ゆゑ、無右エ門短冊瓜にうちわ虫とこぢつける。これくつわ虫の地口なり。世に地口行灯といふはあれど、地口提灯といふはこれが元祖なり。後世おそるべし。よの中諸事抜目のないことこれらに

〔十ウ〕〔十一オ〕



てしられたり。

へ京の七夕は六日の晩に提灯を鴨川へ流しにゆく、夜のけしきがきやうといものだ。

へ天竺のあまの川へ五色の紙がながれたアヤレく。こいつは古いやうなれど、今京の祇園で専らうたひやす。きかせてへの。

へ松や、百人一首の本をもつてきや、たなばたの歌をみるから。

へおいらはお手本の歌をかきます。

へなんでも短冊竹は物干竿の一ばん長いに継足しましやう。ちつとも天へ近いやうに。

「十二ウー十三オ」

さて又今度の開帳に、鼠のからくりをみせて飴を売し男、大きに仕合よく、一月ばかりのうち大金を儲ければ、お礼のため提灯があげたいと桑名屋へ頼んでくれば、無ゑ門から松に木ねずみのこじつけに、からますにきむすめのみづあげもざつと墨絵にかいてやる。

「十一ウー十二オ」



その注文書にいはいはく「一きむすめの墨絵から升の枯木、幹は俵、葉

はさんだわら、とりあはせよく薦舁り候。げんまいかけ値なし。

これではつきやの書出をみるやうだ。

へ木ねずみは栗鼠くするが、きむすめだけぎすくするだら

う。

へおさへたく此ますを、猫にはやらじと、まてくあとは考

へてからいふべしだ。

へモシだんなへ、廿日鼠に四十ひきつかひはたして猫のこる、

とは梅川の妙文句だねなど、かゝあざへもん悠くとまかり

出る。

へねずみがいふ、おれが米櫃や筆筒をかちるより、かゝあが折

く三味線をかちるにはおそれる。

「十三ウー十四オ」

ある娘、妾奉公にいでしに、一体大酒呑なれはとかく尻が坐らず、

どうぞこの末よい所へありつき、世継のやゝさまでも産で、一生

左うちわでお蚕にくるまりたいと、一向欲気のない願をかけし

「十二ウー十三オ」



に、程なく百両の仕度金で、飲倒れの隠居さまにありつきければ、俄に如来様がありがたくなり、絹張の提灯二つ奉納しけるが、これも桑名屋が注文をうけとり、一つの「提灯には十人並にめかけ舟、又一つの提灯には銚子の浜にむらちろりをかいてやりしが、これも大きに落をとる。

へだんなの機嫌をとりかちより、ねだり言をおもかちにすることだ、おれが乗ぬものは馬と比丘尼ばかりだ。

へ小べん組のめかけぶねは、尻に帆をかけて仕度金をはしけたがる。ゆだんすべからず。

へ川柳点の前句に、はないきをかんがへめかけねだるなり、とあれば、めかけには鼻毛よりも鼻息をつゝしむがいゝはへ。

〔十四ウー十五オ〕

ある夜のことなりしに、うつくしい女か桑名やの店へきて提灯を誂へて帰りしが、忙しまぎれに亭主の商売もきかず、一向先のあてがないゆゑさすがの無ゑ門もこの絵組にはてこずりしが、女のとをたばといふ、そのたばが夜来たゆゑ、紅葉に小男鹿の地口にて、

〔十三ウー十四オ〕



夜道にたほしかとこぢつける。そのほかおひく注文はさまざま、  
 頭にできものゝできた小僧が誂へにきた提灯は、あたま山に白雲  
 の彩色、さいしき「絵職人がたにはやね落（おき）の葉（は）にさいとりさし、さてまた  
 どらな息子には竹やほに大どらをかいてやり、百姓の奉納には鉄  
 の木にひよう鳥、出家が頼にはたひ草（まき）に五もん鳥、花鳥草木のた  
 ぐひしゆぐさまざま、地口やらこじつけやら、筆にまかせて描くほ  
 どに、その売ること風下へさるを投る如く、無ゑ門たちまち満く  
 たる大がねもちになる。

へみちゆきもこう寒くてはこたへられぬ。もみちの吸物であつ  
 たまりたい。

へこうたばか長くて勝山がべつたりしては、上方風の女としか  
 みへぬ。

へしゝくつた報だから、もみちのすひものもようごせへ」しや  
 う。

へもしこちの人、それそこに、おつと犬のくそく。

〔十四ウ—十五オ〕



かくて善光寺の如来ほどなく浅草の寺内へいり給ひ、正六つの鐘を合図に御厨子の戸帳を押し開けば、待設けたる老若男女、雲霞のごとくこみいりく、まだ東雲のうす暗がり、参詣の提灯は明方の星より多く、煩惱の闇を照し給ふ。これや阿弥陀の方便品。その時如来いとも妙なるみ声にて、ア、人そよめきの凡夫かな、たゞ奉納の花美を飾り、無益の名利を求めんより大乘正覚のちゑの提灯をもつて宵の闇路を照すべし。この提灯の模様は氣をもまずとも、おのれくが心の闇に迷ぬ工夫をするがよし。されば和泉式部が歌に

○くらきよりくらきみちにも入ぬべし


はるかにてらせやまのはの月

ムゝさてはいろくの提灯をかながへさせたもやつはり弥陀のごん方便であつたか。ホイまづこん板はこれぎり。

へすべていまどきの信心者は名利のためにする人がおほし。しかしそれも悪いことをするよりはましなるべければ、とかく信心をたくわへ給ふべし。こればかりは仔細らしい書入だ。

へねんのため書入れ申候。れいねんのとほり、めでたしく。



	
信濃屋主人 浅草主人 <b>俟待開帳話</b>	馬琴戯作 車和亥發行 翠橋上通油街 仙鶴堂梓行
<b>開帳話下</b>	今戯作 亥亥發行 上通油街 堂梓行
<b>開帳話下</b>	琴戯作 和亥發行 橋上通油街 鶴堂梓行



# 小夜中山霄啼碑

〔一才〕

小夜中山霄啼碑

新坂蕨鮭児育飴 由來伝レ世夜啼碑

鯨音断絶無間事 大士方便垂 大慈

壬戌年余浪華に遊歴し。遠州小夜の中山を遇の日。無間山の

縁起三綴を買得たり。因て是を翻案して者個の稗史を作る。通計

八回目次左の如し

○河井庄司靈夢を感話 ○刃の雉の説 無間の鐘の事

○鶴見稻九郎庄司夫婦を殺 ○河井乙八郎が伝附夜泣石の事

○子育観音利益 飴の餅の事 ○乙八郎敵をねらふ事

○女兒漣が伝身代観音の縁起 ○月の輪の里敵討の事

享和四年甲子上月

正めい養笠いんきよ

著作堂馬琴著

(振り仮名・句点はそのまま)

〔一才〕



小夜中山霄啼碑  
 新坂蕨鮭児育飴 由來伝レ世夜啼碑  
 鯨音断絶無間事 大士方便垂 大慈  
 壬戌年余浪華に遊歴し。遠州小夜の中山を遇の日。無間山の  
 縁起三綴を買得たり。因て是を翻案して者個の稗史を作る。通計  
 八回目次左の如し  
 ○河井庄司靈夢を感話 ○刃の雉の説 無間の鐘の事  
 ○鶴見稻九郎庄司夫婦を殺 ○河井乙八郎が伝附夜泣石の事  
 ○子育観音利益 飴の餅の事 ○乙八郎敵をねらふ事  
 ○女兒漣が伝身代観音の縁起 ○月の輪の里敵討の事  
 享和四年甲子上月 著作堂馬琴著

作者曰

草双紙の金平化物を俳諧に譬ふれば、守武千句 淀川油槽のたくひなり。近此これに滑稽を尽しおかしみを専らとせしは宗因が談林の風調なり。今又一変して正風に帰す。ここに隣里の児等が需めに応じ、今春の愚作もつとも大まじめにして地口悪洒落の書入なし。夫あることを有がまゝに書くは戯作にあらず、なきこととを有が如く作るを真の戯作といふよし明の謝肇淩もいへり。外くの敵討物とよく御読比べ御評判下さるべく候。私方よりせり作 出し不申候、勿論でき合の種本一切御座なく候以上。

後宇多の院弘安年中のことかとよ遠州松葉が郷に川井庄司成信といふ人あり。その先祖を尋るに月の輪三位高実卿とてやんことなき雲の上人おはしけるが、故ありて勅勘の身となり給ひ、遠州に左遷せらる。これよりその子孫松葉郷に住して郷士となる。川井庄司は高実公の嫡孫なり。庄司弓矢の道の達しければ、鎌倉の執権北条貞時に仕へけり。妻を迎へて三年の月日を過せども子な



きことを憂ひ、夫婦は小夜の中山の観世音に祈願をかけ、何とぞ一子を授け給へとぞいのりける。しかるに或夜観世音夫婦の枕上にたち御手に虚実の二字を持せ給ひ一首の哥を詠じ給ふ。その哥に○うくひすの古巢のうちのほとゝぎすそは子にあらずこは子なりけりと、繰返し吟じ給ひ、かの二児を授け給ふとみて夢覚ぬ。庄司、さては念願●成就せしにやと喜ぶ所に、此月より妻のいはねたゞならぬ身となれり。

へ河井庄司 くはんぜおんの霊夢を感じる。

へ庄司が妻いはね

へ庄司が妻懐胎して月の重るに従ひ、その腹常の懐妊よりはるかに大く見へし、医者に見せてこれを尋るに、みこもるところ双子ならんといふ。

○かねて御披露いたしました俳諧歳時記やうく出版いたしました。

〔二ウー二オ〕

こゝに又庄司がいとこなりける男に鶴見稻九郎といふものあり。いとけなき時より父母に後れて寄辺なれば、庄司が父世に在し日より家に引とりて養ひけり。かく庄司が親には大恩ある身なれども、その心正しからず、邪智放埒の行ひのみなりしかば、庄司気の毒に思ひ折く意見を加ゆれども更に用ず、却りて遺恨を差挟みける。然に稻九郎庄司が妻いはねに心かけ、人目を忍び口説寄りて道ならぬ恋をいひかくるといへども、いはねは操正しき女なればたゞ恥しめてとりあへず。稻九郎ますます胸を焦し、或時庄司が留守を窺ひいはねをとらへ「無理無体に思ひを晴さんと挑み争ふところへ庄司帰り来り、この体を見て大に怒り稻九郎を散ぐに打擲し、これまで身持不埒のことゞも詳しく言聞せ、遂に家を追出す。稻九郎は身の誤りに返す言葉

もなく、それより川井が家を立去り、暫く希戸呂の郷にしのみりたり。

「これく君よ、たつた一度が叶はずは半分でもだんない。

半分がならずは四半分、四半分ならずは五半分、五半分がならずは待てく後は算盤で割て見てくどかふ。

「悪いことさんすな、こちの人に告るそへ。

「鶴見稻九郎無体にいはねをくどく。

「そうおなかの大きくなつた所がなほ命だ。」

「汝は我父世にありし時不憫を加へ給ひしゆへ、わが片腕とも

思ひの外、見下げ果たるこゝな不届者めが。

「いはね気のどくがる。

「此家に叶ぬ、出て失しやう

「出くゆけといはず共、俺の方から出ておいでなさる。人使ひ

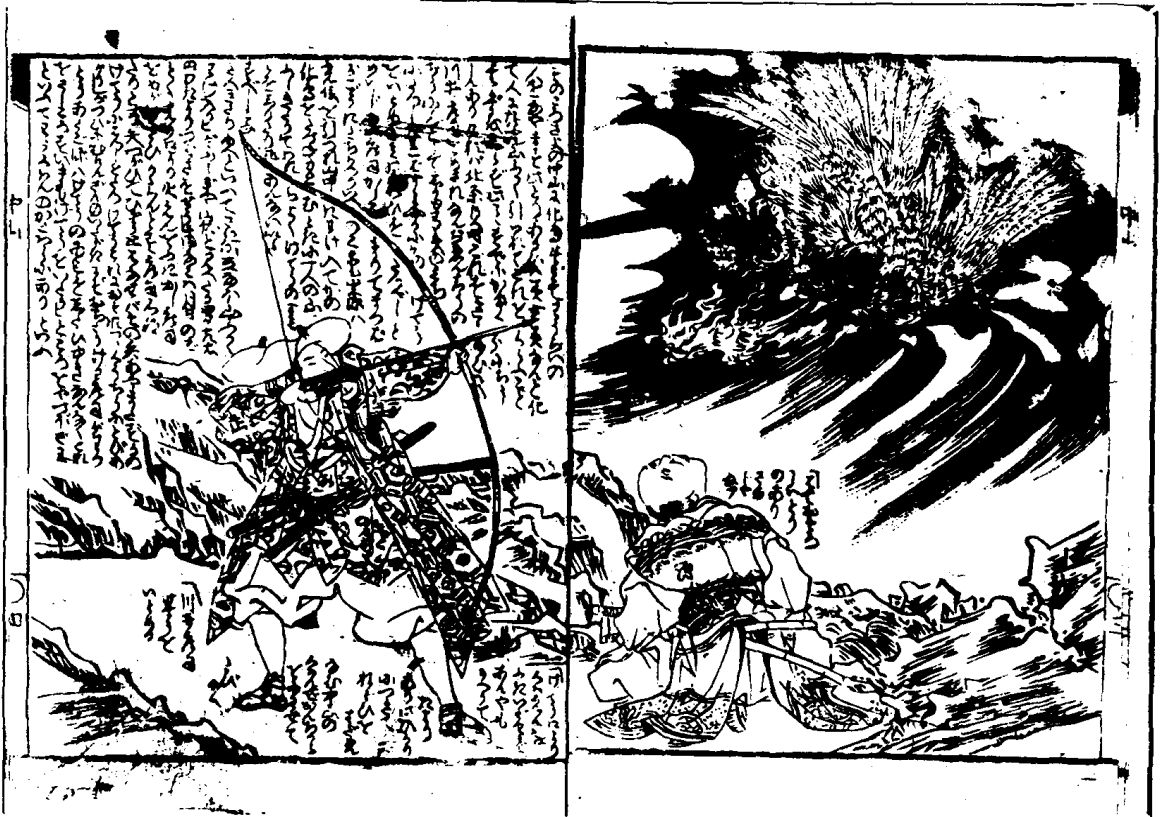
は悪し食い物をば食せず、こんな家にいられるものか。きく

川の菜飯を三十六文がくへは白水を流さア、ばかくしい。

〔二ウー三オ〕



その頃小夜の中山に化鳥すみて往来の人を悩す。此鳥或いは美女  
 美男と化て人に戯れ、山深く引いれてこれを食ふこと其数を  
 此こと既に鎌倉に注進ありければ、北条貞時これを聞拾ひて川井庄  
 司を召れ、汝遠州の住人として然も弓矢の道に達したれば速かに  
 かの化鳥を射止め、民の憂を断つべしと命じ給ふ。庄司かしこまり  
 て松葉郷に立帰り、家の子愛岩源八光信を引つれ山中にわけ入て、  
 かの化鳥をたづね求む時に、一人の山伏来りて、我等よく化鳥の  
 棲処を知りたり、御案内いたすべし、こなたへ来り給へといふて先  
 に立、なほ山深く分入りしが、ふしぎや山伏と見へたる男左右の脇  
 より翼を生じ、眼は月日のごとく光り、口より火焰を吹出し、庄司  
 をめがけ飛掛らんとす。庄司心得たりと弓矢つがひてひやうと放せ  
 ば、その矢あやまたずかの化鳥にはつしとたつ。化鳥これに恐れ  
 つゝ空中に飛上りしが、終に無間山の頂にぞ墮ちたりける。庄司  
 が若党あたご源八化鳥のあとを慕ひゆき、難なくこれを刺殺す。今  
 も化鳥を射たりしところを矢壺沢といふて往遠の傍らにありとい  
 ふ。



へはて恐(おそ)しい鳥(とり)のありさまじやなア。

へ化(け)鳥(てう)口(く)より火(くは)焰(えん)をふきいだせば暗(あん)夜(や)もかへりて頼(た)りあり、此(こ)

光(ひかり)につきて狙(ねら)ひを定(さ)めん、なむ中山(くはん)の観(くわん)世(ぜ)音(おん)、力(ちから)をあわせ

てたび給(たま)へ。

へ川(かわ)井(い)庄(じやう)司(し)けてうを射(い)とめる。

〔四ウー五オ〕

かくて庄(じやう)司(し)主(じゆ)従(じゆ)かの化(け)鳥(てう)をみるに、ふしぎやこの鳥(とり)その大(お)サ驚(おど)ほど

ありて形(かたち)は雉(き)の如(ごと)く総(そう)身(み)の羽(は)悉(ことごと)く刃(やいば)なり。今(いま)もさよの中山(くはん)刃(やいば)の

雉(き)の由(ゆ)来(らい)とて飴(あめ)の餅(もち)売(う)る家(いへ)よりこれを出す。東(とう)海(かい)道(どう)上(じやう)り下(げ)りの旅(り)人(にん)

は買(か)ひて見るべし。こゝに無(む)間(げん)山(さん)観(くわん)音(おん)寺(じ)の住(ぢゆう)僧(そう)此(こ)事(じ)を聞(き)給(たま)ひ、化(け)鳥(てう)

妄(もう)念(ねん)を晴(は)らし、ながく此(こ)山(さん)に崇(た)らせじとて、か(か)の鳥(とり)の羽(は)を取(と)り集(あつ)め、

又(また)古(こ)鏡(きやう)銅(どう)器(き)を勸(くわん)化(け)して一(いつ)ツの撞(つ)鐘(かね)を鑄(い)させ給(たま)ふ。無(む)間(げん)の鐘(かね)これな

り。そもく小(こ)夜(よ)の中(な)山(さん)無(む)間(げん)の鐘(かね)を申(ま)すは日(に)本(ほん)三(さん)鐘(かね)のそ(その)一(いつ)にし

て、江(え)州(しゅう)三(さん)井(い)の鐘(かね)、播(ばん)州(しゅう)高(こう)砂(さ)の鐘(かね)、遠(あん)州(しゅう)無(む)間(げん)の鐘(かね)これなり。此(こ)鐘(かね)の

こと玄(げん)恵(え)が元(げん)亨(こう)釈(しやく)書(しょ)にも見(み)えたり。此(こ)無(む)間(げん)の鐘(かね)をつく時(とき)は

願(げん)望(ぼう)成(じやう)就(じゆ)疾(じゆ)く自(じ)在(ざい)なり。されど未(み)来(らい)永(えい)劫(けつ)無(む)間(げん)地(ぢ)獄(ごく)に墮(お)ち、現(げん)世(ぜ)は

〔四ウー五オ〕



蛭に責られる、と言伝ふ。もし願ある人寺に來りて鐘をつかんことを求めば、住僧まづ一塊の握り飯を与へてその人に食む。その人これを食んとすればその飯蛭と化して食ふこと叶ず、故にその念をたちて空しく帰るとなり。今日坂の蕨餅自然と蛭の形に似たるは此因縁なりといふ。さてまた庄司が若党あたご源八は化鳥の毒氣にや触れけん其夜俄にみまかりけるぞふしぎなる。

へ観音寺の上人因果の業をしめして愚痴の凡夫をさとし給ふ。

へ近年いろくな不仕合で此物前問屋の払ひができかねます。何とぞ鐘をお撞かせ下さりませ。

へわれらは池田の宿の傾城に打こみ、こんな形になられました。どうぞ無間の鐘をつひて彼お敵を請出しとう存じます。」

へわたくしは子どもが五人ござります上、亭主にながく、思われまして難儀いたします。とうぞ五六メが米でも薪でもつきたふござります。

へ飯の蛭になるを見ては、鐘をつく気はない。怖やのく。

〔五ウ〕

庄司も発熱して何となく心地悪かりければその夜は観音寺に一宿して暫く病養いけるが、鶴見稻九郎早くも此事を聞出し、庄司を討てわが恋を叶えんと、ひそかに観音寺に忍び入り、庄司が居間を窺へば、庄司は衾引かつぎて臥しむたり。稻九郎折よしと心に喜び、次の間にありし茶臼を担き来り、微塵になれと投下す。あはれむべし川井庄司、頭碎けて脳みそ出、血潮四方へ奔り、あへなき最期ぞ是非もなき。此時すでに三更の比ほひにして、所化達みな熟く寝入りたれば、これを●知らず。稻九郎はしすましたりと早くもその場を逃去りけり。

へ猿蟹の合戦ではないが、石臼で敵をとつてこませと、いやはや庄司千万。

へやうんとな。

へ稲九郎石臼にて庄司がこうべを打碎き立退く。

〔六オ〕

川井庄司が妻いわねは此とき臨月なりければ、安産今日や明日やと待るたるに、はからずも庄司観音寺にて討れ、敵もこれと定かならねは、こはそもいかにと歎き悲しみ、これより毎日無間山へ参詣し、夫の菩提を祈りける。ある日いわね観音寺より立帰るに雪いたく降積りて道いと難儀也。雪風に冷たる故にや、俄にむしかぶりて一足も歩み難く、暫く松の木陰にやすらひるたるところへ、鶴見稲九郎来かゝり、いはねが悩みいるを見て大に喜び、さまぐくどきよりて、終にいわねを引たてゆかんとす。

へそもじが毎日観音寺へ参るといふことを知つて跡をつけてきたのさ。

へ人でなしの稲九郎、言葉交すもけがらはい、きりくそこ

〔五ウ〕〔六オ〕





を退くまいか。

へけふは否でも応でも連てゐて女房にする。お心にさへ従へ

ば、おしつけひり出すそのがきめも、俺様が子にして育て、

やるはさ。

〔六ウー七オ〕

いはねは夫の横死せしこともしや稲九郎がなす業かと疑ひなが

ら、甲斐なき女の身なればそのことを質し難く、いとゞ無念に思ふ

折から、又もや彼が不義の恋慕、聞くも中く忌しく、騙し討にう

たばやと謀り寄り稲九郎が刀を引抜き、横なぐりに切りつくる。

稲九郎眼早く身をひねりてこれを避けたれば、その刀道の辺の石

にきり付、刃二三寸こぼれたり。稲九郎大に怒り、忽ち刀を奪い

とり、いはねがあばらより乳の下かけて切先ぶかく斬込んだり。

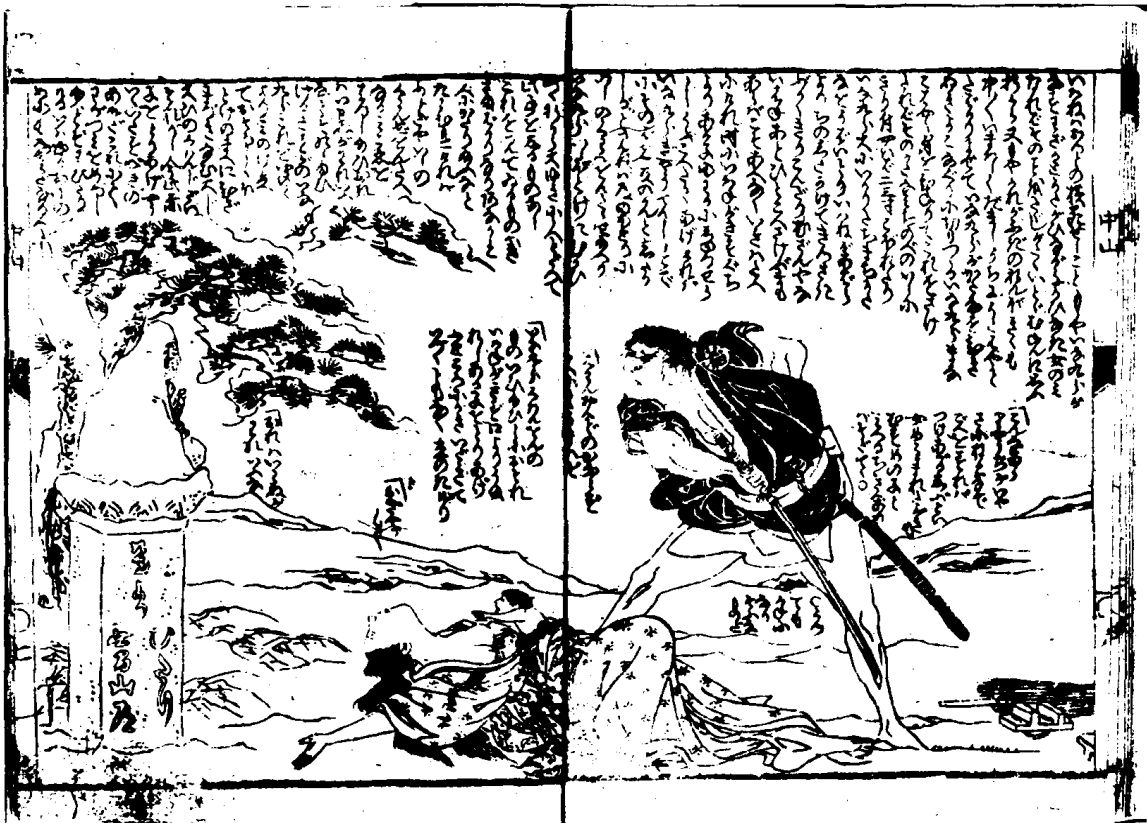
無慚やないはね、あと一声叫ぶ間もあらばこそ、あへなく息は絶へ

にけれ。時にいはねが傷口より赤子俄に出生し、産声高くあげけ

れば、稲九郎仰天し、直にそのばを立のかんとしたりしが。と見れ

ば道の辺に石の観音立せ給へり。稲九郎石佛に向ひ「つゝ、折か

〔六ウー七オ〕



ら大雪に人途絶て此事を知るものなし。これを見てゐるものは貴様ばかりなり、あなかしこ、人に語り給ふなど戯れければ、ふしぎや石の観世音妙なる御声を發し給ひ、おれは言ぬがわれ言ふなどぞのたまひける。さすがの稻九郎これを聞くより身の毛立て恐しく、仏の前にひざまづき、なむ大慈大悲の観自在、それがし今此赤子をとりあげ養育いたすべきの間、これにて我罪を滅し給へとぞ詫びたりける。いはゆる鬼の目にも涙なるへし。

へこんな荒療治がいやさに猫撫声をすればつけあがる、しぶとい女め、生れたがきも娘の子とみへる、乳さへあれば育て、  
●売ても金になりそふなものだ。

へ観音寺の、かならず人に語るまいぞ。

へ稻九郎観音のもの言給ひしに畏れ、いはねがきず口より生れし赤子をとりあげ、懐にかき抱きていづくともなく立のまけり。

へおぎやア〜。

へおれはいわぬがわれいふな。

〔七ウー八オ〕

観音寺の上人いはねが参詣の帰り道にて殺されたることを聞給ひ、かねて一面の因あればいとど不憫に思ひ給ひ、すぐさまその場に至りて読経し、死骸を寺に引とり葬らんとし給ふに、いはねが亡骸大盤石のごとく更に動すこと能はず。せひなくその所に葬り、印に一塊の円石を立て、南無阿弥陀仏の六字をきりつけ給ふ。しかるにその夕よりこの石よなく声を發し、赤子の啼くごとく泣きければ、世の人夜啼の石と呼びなせり。今日坂より東のかたの山道往來の真中にある夜啼の石これなり。

○こゝに又小夜の中山に飴の餅を売る正介といふ者あり、いはねが殺されし其夜より一人の出家ふところに「赤子」を抱き、水飴を買ひにくること毎夜也。此へんに見なれさる出家といひ法師の幼子を養育することを訝しく思ひ、或夜その跡をつけて行に、夜啼の石の辺にてかの出家を見失へり。亭主いよくふしぎに思ひ、観音寺にゆきて此事を住持に語れば、上人聞給ひて、我も思ひあたることこそあれ、今日ご辺が観音へ捧し賽銭に印をせよとのたまふ。亭主即ち十二銅の銭に朱を●もてことごとく正の字を書しるし、これを本尊に捧げつゝ急ぎ我家へ帰りけり。

へやれくお若いご出家様のおいとしや、どれく婆アがちつと抱て温めてあげませう。

へ坊様の乳貰いとほめづらしいことだ。

へよなきの石、しるしの松。

へ今夜も水あめをかいにきました。だがよ泣くなく。

〔八ウー九オ〕

かくて其夜かの出家又飴を買ひに来りける故亭主正介その銭を見る

〔七ウー八オ〕



に、わが印を付置し観音の賽銭なりければ大に驚き、夜の明るを待兼て次の朝観音寺へ走りゆき、此ことを詳しく上人に告ぐる。上人さては観世音の利益疑ひなし、いわね殺されし時臨月なりと聞及ぶ。しるしの石を取除けて見よとのたまへば、正介もあやしとおもひつゝ、「うちつれ夜啼石のほとりに来り、石を掘返さんと開きて見るに、いわね死てより両三月に及べども死骸はなほ生るがごとくにて、一人の幼子母の乳房にとりつき水あめをなめいたり。こは有難き観世音の利益かなと感じつゝ、上人その幼子を衣の袖に抱きとり、すぐさま寺に引取り、乙八郎と名づけ養育し給ふ。いわねが死骸なほ元の如く埋めけるが、これより此石夜なくことなし。さて大石の啼きたるにはあらず、此おさな子の泣きたるなるべしと、人みな疑ひをはらしけり。其後此石往來の邪魔なりとて取除んとしたる者、祟をうけて病にそみなどしければ、里人恐れてそれより後は石を動かすものなし。今も往來の真中に有るは此いわねなりと言伝ふ。

へしかも男の子じや、どれぐ愚僧がとりあげて弟子にしませう。



〔八ウー九オ〕

へこれはふしぎな。

へ枯たる木にも花を咲す、大悲の誓願ありがたしく。

へおぎやア〜。

へこれはけしからぬ、赤子をほり出したそうな。

へ此子の持薬には妙見町の山原七左衛門で取次ぎます浅間の万

金丹がよふござります。

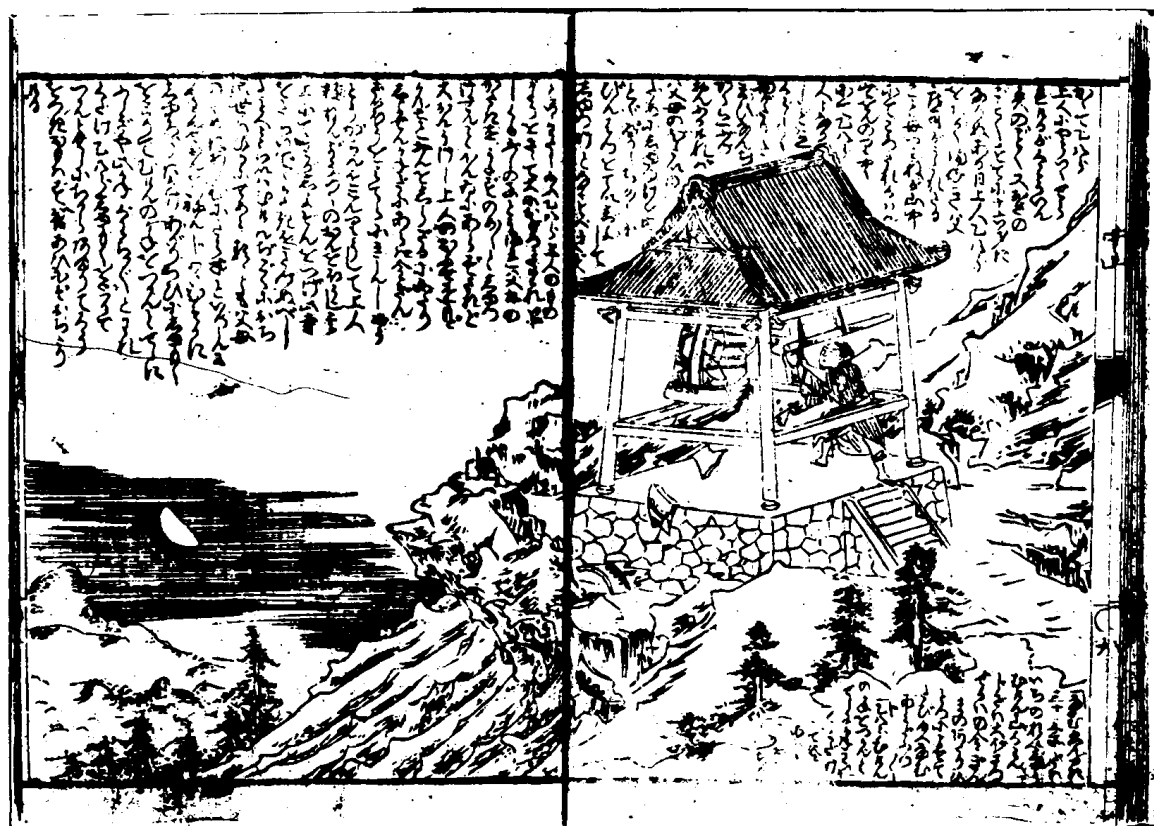
へ下りには京都の姉が小路の正風亭で売る風流扇を土産にいた

そう。

〔九ウー十オ〕

かくて乙八郎上人に養育せられけるが、光陰矢のごとく又梭のごとく、既に十六才になりぬ。或日上人乙八郎を近く招き、父庄司が討れたること、母いわねが山中にて殺され観世音の利益にて乙八郎人となりしこと迄詳しく物語りたまひ、汝かく迄仏恩深ければ父母の菩提のために出家をとぐべし。近くに髭髪を剃除して出家となすべきぞ」と言渡し給ふ。乙八郎は上人の物語をきゝて大に驚き、我いやしくも武士の子と生れ父母の敵を討ず、のめくと出家せんこと

〔九ウー十オ〕



本意にあらす。されど大恩受し上人の仰せをもどかんこと恩を知らるに似たり。所詮金だにあらば金銀財宝をみ寺に寄進し、堂塔伽藍を建立して上人数年養育の恩を報じ、其上にて我所存を告げ、此寺を立出で敵を尋ぬべし。たとへ未来は無間地獄に墮ち、此世は姪に責らるゝとも、父母のために惜むに足らずと一心に観世音を念じつゝ、ひそかに鐘楼に馳上り遂に撞木をとりて無間の鐘をつかんとせしに、ふしぎや此鐘ぐわらぐと割砕け、乙八郎撞木をとりてつかんとせしに力余りて楼を撞き、おもはず谷あひにぞ落ちたりける。

へなむ遠州三十三所第一の霊場無間山観自在大菩薩、世界の金ぎん目のあたり一つに寄てたび給へ、なむあみだふつく。  
へ乙八郎無間の鐘をつかんとせしに、鐘割砕けて谷あいにおちる。

〔十ウ〕

乙八郎思はず谷合に落ち入たりしが、幸ひにけがもせず、たゞ茫然と立ちいたり。時に一人の老僧忽然と現れ、汝父母の讐を報はんとすること健気なり。汝が父母の敵は即ち庄司がいとこ鶴見稻九

〔十ウ〕〔十一オ〕



郎といふ者にて、今近江の国にあり、早く彼処に尋ねゆきて本望遂げよ、我は此山の守護神八王子一寸方権現なりと、忽ち光明赫灼として峠の方に飛去り給ふ。さて又無間の鐘の落砕けたる所一つの井戸となり、鐘は壹百丈地の底に埋まりて、此の水つねに泡立ちければ、此山を泡が嶽とよびなせり。今も二月初午には貴賤群衆して此井戸を見物するとかや。

へ乙八郎靈験を見てよろこぶ。ありがたやく。

へ無間の鐘地の底えおちいりてその跡井戸となる。

〔十一才〕

乙八郎ふしぎの靈験を蒙り、急ぎ寺へ立帰り上人にそのことを詳しく物語り、敵討の暇をたまわり候へと願ひければ、住持も無間の鐘の砕け落たるに驚き給ひ、此上は何か咎めん速かにうち立つべしとて、父庄司が形見なりける関の孫六が鍛へたる一ふりの刀をとり出し、又一枚の短冊をとり出て、これは汝が母の手跡なり、これを母とも見よかしと二品を渡し給へば、乙八郎涙ながらにかの短冊を見れば

○うくひすのふるすのうちのほとゝぎすそはこにあらずこは子なりけり

としるし、裏に弘安元年一子を中山の観世音に祈り奉りしに大師夢中示現の歌とあり。乙八郎此二品をうけとり上人に暇を告げ、たゞちに近江へうつたちけり。

へ観音寺の上人乙八郎に父母の形見をあたへ給ふ。

乙八郎かたき打にたびたつ。

へ返すくも御恩徳いつの世にかは忘れ申さん。

へ首尾よく本望を遂げ、めでたく帰参めされ。

〔十一ウー十二オ〕

かくて乙八郎は日かずをへて近江の国に到り、月の輪の里をよぎりし時、日すでに暮ければ漁師の家に宿をかり、其夜を明す。此月の輪の里といふは草津と瀬田の間にて、月の輪の池とて名高き池あり、即ち水上のほとりなり。此家の主は湖水に網を下し魚とつて渡世とす。一人の女ありてその名を小波といふ、ことし十六才にして顔色美なり。かの小波は乙八郎が美男になづみ、其夜ねやに忍びゆき、心のたけをくどきけれども乙八郎は願ある身をもて請ひかず、小波とてもかく思ひ詰し身の恋死」なんよりは刃につらぬかれ一思ひに死ぬべしと、押入より刀をとり出し既に自害せんとす。乙八郎あわて押し止めその刀を奪ひとりてよくくみればあつばれの銘作なれども、切先の刃三寸ばかりこぼれて鋸のごとし。ふしぎに思ひて其故を娘に問ば小波いふやう、それにこそ悲しき物語語のはべる、妾父此刀を大切にするをふしぎに思ひ、其わけを問ども語らず、ある日父酒に酔てふと語りけるは、我昔さよの中山にて懐妊の女子を殺したりし時、我秘蔵する刀の刃こぼれたり。汝は

〔十一ウー十二オ〕





其女の傷口より生れし子なりしが、我見殺にするにしのひず、かく  
 養育してわが子とせしといへり。

へよい殿御じや、宿屋てなうても大事なくは、いつまでくご  
 逗留あそばしませ。

へりやうしのむすめ小波。

へ一人旅なら水風呂なしに負て三百じやぞ。しかしなまじよい

若衆で、ちとあんちんがならぬはへ。

へ行暮たる旅のもの、一夜の宿をたのみぞんずる。

へ川井乙八郎漁師の家に宿をもとむる。

〔十二ウー十三オ〕

されば正しく今の父は実の母の敵ながら、藁の上より養育の恩あれ  
 ば、いたしかゆしの恩と仇、とても永へてかひなき此身、いつそ殺  
 してくと、前後不覚に歎きける。乙八郎は此物語をきゝて心おど  
 るき、しからば父母の形見とすべきものありやといふに、小波  
 守袋のうちより一枚の短冊を取り出し、母上世を去給ひし時肌身に  
 添し守ぞと、今の父の給はりし。其中にありし此短冊、もしやこれ

〔十二ウー十三オ〕



が母上の手跡にもやと見せければ、乙八郎手にとりてこれをよめば

○あづまぢのさよの中山なか／＼に夢もむすばすいはかねのどこ

としるしたり。これ我所持する短冊と寸分違ぬ同筆なれば、さては此宿の「主は敵稻九郎にてありしよと大に喜び、夫より私に身の上を語り聞せ、我とそなたはふた子兄弟なるべし。昔我父母中山観音へ子なき事をかなしみ、祈誓をかけ給ひしに観世音示現の詠歌に○うぐひすのふるすのうちのほと／＼ぎすそはこにあらず子はこなりけり、といふ歌の意をがんがふるに、そなたと我とは双子にて母上討れ給ひし時、そなた先生れしを稻九郎とり上げてそのばを逃去り、我は胎内にありし故母と共に埋れしを、観世音の利益にて我命助れり。そなたは敵に養はるれば、そは子にあらずと示し給うか。

へだん／＼の物がたり、初めてきいた、私がかなしさ推量して下さんせ。

へふた子は初生を乙子とさだむ。そなたはしんみのわがいもと。

へさては此家のあるじこそ敵いな九郎であつたか、かたじけない。

へそんならお前と私はふた子にて真実本のきやうだいであつたか、尽ぬ縁とてふしぎな対面。

〔十三ウ—十四オ〕

△さもあらばあれ、そなたのためにも父母の敵なり、今宵稻九郎が寝間に手引して敵を討せよといふ。小波はたゞこれ夢みる心地して呆然たるはかりなり。暫くして漸く心を鎮め、一旦養育の恩はともあれ、いかにも手引いたすべし、養父は毎夜漁にいで、夜半ごろに帰りくれば、妾が合図を待せ給へと、はじめの恋もさめ果、或ひは喜び或ひは悲しみ、きやうたい夜と共に語りつゝ、「いつしか夜半の鐘きこえれば、小波はおのが寝間に入て休みけり。暫くありて小波しのびやかに来り、稻九郎只今

歸りて閨にいりぬ、あの一問こそ臥所なれ、討洩し給ふなと言ひす  
 て、走りゆく。待設けたる乙八郎、目釘湿してしのびよれば、行灯  
 消てめざすも知ず、終に隔ての障子蹴放し、いかに鶴見稻八郎、な  
 んぢがために父母を討せたる川井庄司がわすれ形見乙八郎也、たち  
 あがりて勝負せよと呼われれば、心えたりと起んとするを乙八郎とび  
 かゝり、夜着の上より二刀三刀、柄も砕けよと刺通しければ、たち  
 まち息は絶果たり。それより乙八郎しづかに灯を持来り首を刎ん  
 と夜着引まくれば、こはいかに、稻九郎にはあらずして妹小波総身  
 朱に染てぞ死ゝるたる。

へいな九郎夜網よりかへりきて家の様子をいぶかしがる。

へハテがてんのゆかぬ。

へさては養育の恩にからまれ、敵いな九郎に替りて我に討れし

か、ふびんやなア。

〔十四ウー十五オ〕

乙八郎は人たがいにて小波を殺し、こはいかにとおどろき悲しみ  
 枕許を見れば一通の書置ありて、敵ながら養育の厚恩あれば一た

〔十三ウー十四オ〕



び養父の身替りとなりてその恩を報したく候、兄上には首尾よく  
 本望を遂給へとぞ書いたりける。乙八郎これをみて、ますく妹が  
 切なる志を感じける。この折から稲九郎帰りきて大におどろき、  
 乙八郎を捕んとす。乙八郎願ふところと立向ひ、いかに稲九郎、我  
 は川井庄司が忤乙八郎也。妹小波汝が養育の恩を思ひ身替りとな  
 りて我に討れたり。すみやかに立上りて勝負せよといふ。稲九郎  
 きゝて、庄司に忤なし、汝盗賊ならんといへば、乙八郎からくと  
 笑ひ、おろかや、小波」と我とは双子にて、観世音の利益にて斯様  
 くのことありと、わが身の上を演説す。稲九郎さては逃れぬとこ  
 ろなり、互の運を天に任すべし、いかにも庄司夫婦を殺したるは我  
 なりと、互に名のりあい、しばしの間戦ひしが、観世音の擁護あ  
 る乙八郎飛鳥のごとく身をひらめかし、終に敵を討取りける。  
 へエ、ざんねんな、しにもものぐるひだ、観念しろ。  
 へち、はゝのかたき、おもひしれ。  
 へいまにはじめぬ観世音のご利生、ありがたしく。  
 へこれはふしぎな、ゆめではないか。

〔十五才〕

〔十四ウ—十五才〕



乙八郎は難なく稲九郎を打とり、ふたゝび妹が死骸を尋るに、今迄ありける小波が死骸みへず。こはふしきとあやしみ思ふところ、又小波己れか寝間より走り出るに、その身すこしの傷もなし。乙八郎ますく疑ひて仔細を詳しく物語れば、小波大におとろき、妾兄上に別れ寝間に入しが頻りに眠りを催し、今迄熟睡して何ごとも知らずといふ。乙八郎はじめて心付き、懐中の掛軸をとり出してみれば、観世音の尊像ずたくに切れてあり。さては観世音身替りにたゝせ給ひしなるべしと、信心肝に銘じ、それより兄弟打つれて中山に帰り、観音寺の上人にまみへ、詳しく物語りければ、上人大ひによるこひ給ふ。●其のち乙八郎父が家督を相続し、子孫目出度くさかへけり。

へまたさゝなみは尼となり上人の弟子となりて父母の菩提をと  
 くらひける。世に河井の宗仲尼といふはこれなり。

へ乙八郎元服、めでたしく。

月氷奇縁 全五さつ よみ本かたき打きだん

曲亭馬琴作

(十五ウ)

